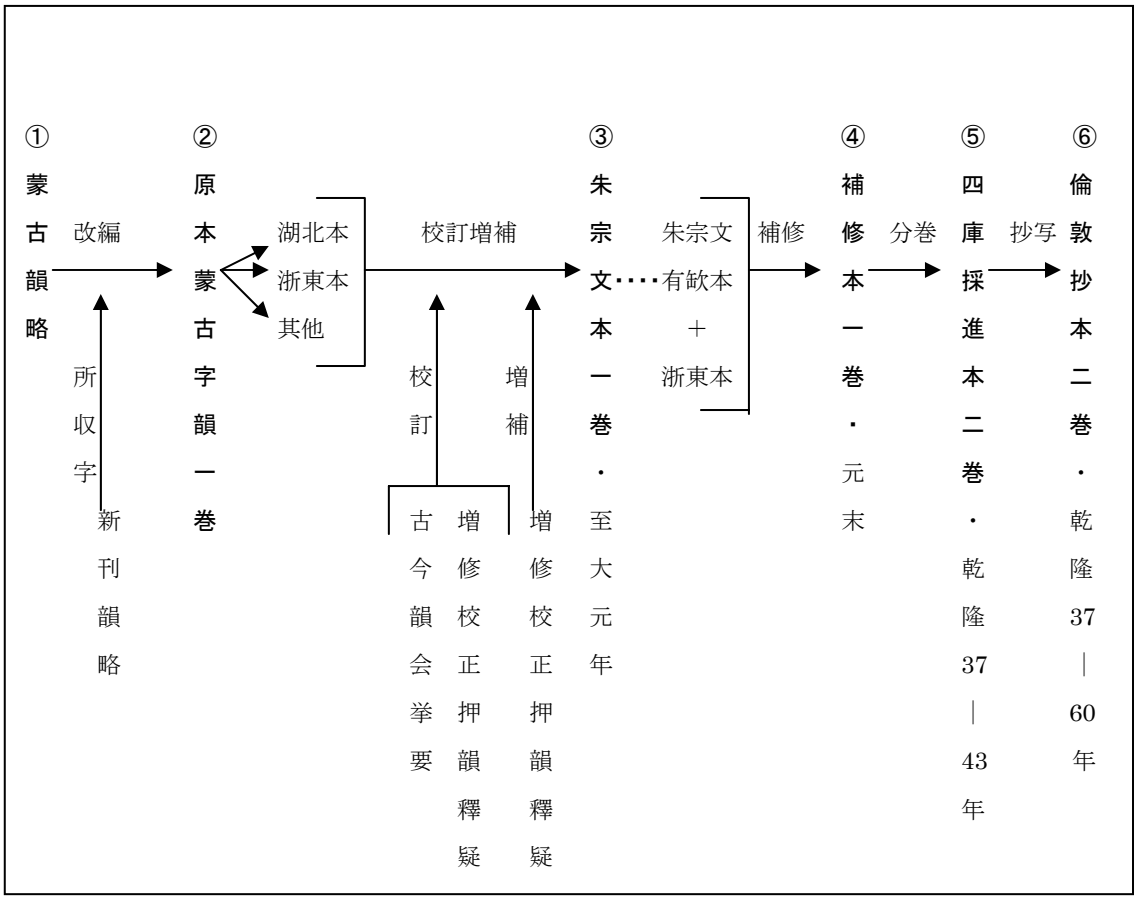
古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 81 号(2009.8)

# 原本蒙古字韻考

吉池孝一

## 1. 模式図

2008 年 11 月 18 日と 19 日の二日間にわたり、韓国の城南市にある韓国学中央研究院で、パスパ文字とハングルに関わる国際会議が開催された。下の模式図は、その席上公表した図にやや修正を加えたものである[1]。修正とは、④と⑥の間に⑤を新たに加え、その後公表した吉池 2009 によって⑤と⑥に書写年を追加したことをさす。表中の『蒙古韻略』と「原本蒙古字韻」の関係については当時暫定的なものであることを断わって図示したものであり、現在では別の考えをもっている。その考えについては他の機会に述べることとして、作業の一区切りとしてここに再度提示し、その後の知見も少々加え簡単に説明をする。最後に本模式図の成立に係わる仮説の一つにつきやや詳しく述べる。




上に今に伝わる抄本の蒙古字韻が成立するまでの過程を図示したわけであるが、何故こ

[1] もとの模式図は吉池 2008d に掲載されている。予稿集の性格を持つものなので入手は困難であるかもしれない。

のようなことに時間を費やすのかということに就いて先ず一言しておきたい。周知のように、パスパ字漢語資料は表音文字で体系的に漢字音を表記した資料として元代漢字音の研究に欠かすことのできない資料である。現にパスパ文字が示す音形を利用した近世音の再構成もある。しかしながら、パスパ文字は何のためにどのように作られその後どのように利用されたか、パスパ字漢語の研究の中心となる蒙古字韻（パスパ文字と漢字が対応した書物）は何のためにどのように作られ如何なる改訂を経たかということを明らかにしなければ、音韻史の資料として十分に利用できないとの思いがある。特に蒙古字韻は、刊本は既に無く、唯一のテキストとして不完全な抄本のみが今に伝わり大英図書館に所蔵されている。この抄本には誤字脱字が多いだけでなくその構成にも不可解な点がある。更にこの書はふつう韻書に分類されるのであるが、韻書らしからぬ部分もある。パスパ文字が示す漢字音の音形と蒙古字韻に収められた漢字のグループが示す音類がつり合わないようにも思える。どうも安心して利用できないのである。このような不安が解消されたわけではないが、先に述べたように、2008年11月に、韓国城南市の韓国学中央研究院において“訓民正音とパスパ文字”というテーマのもと国際会議が開かれ、わたしは“原本蒙古字韻再構の試み”と題して報告をする機会を与えられた。そこで、蒙古字韻という書物についてのこれまでの考えを整理し、今後の作業のための一区切りとして、不完全ではあるけれども上掲模式図を公表したという次第である。

なお、これ以後、現存する書物には『　』を付し、佚書には「　」を付す。説明の便宜のため、蒙古字韻というように裸で記す場合がある。これは特定の資料としてではなく広くこの種の書物を指すためのものである。

## 2. 模式図の略説

ロンドンの大英図書館が所蔵する朱宗文校訂序(序年至大戊申・1308)が付された抄本『蒙古字韻』(これ以後『倫敦抄本』と称する[2]) は存在が確認されている唯一の蒙古字韻である。『倫敦抄本』が朱宗文の増補校訂に係るものであるからには「原本蒙古字韻」なるものがあったはずであり、どのような変遷を経て「原本蒙古字韻」から『倫敦抄本』となったかということが問題となる。もっとも、蒙古字韻の唯一のテキストは『倫敦抄本』のみであるから、実際の作業としては、『倫敦抄本』の分析から出発して、徐々に「原本蒙古字韻」にさかのぼって行くことになるのであるが、ここでは、結論として模式図を提示し、「原本蒙古字韻」から出発して、どの様な過程を経て、現存する『倫敦抄本』となったかという順序で述べることにする。

①「蒙古韻略」から②「原本蒙古字韻」(一巻)まで。さて、「蒙古韻略」には崔世珍『四声通解』(正徳十二年・1517)に引かれるものと熊忠『古今韻会挙用』(大徳元年・1297)に引かれるものがある。これらの「蒙古韻略」が同一書であるのか或いは藍本とその改訂版の関係であるのか或いはそれ以外の関係であるのか詳細は分からない。分からないけれど

[2] かつて『ロンドン写本』とも称したが、ここでは便宜として『倫敦抄本』に統一する。

も、同一書名のパスパ字漢語の書であるならば、その基本となる構成は同様であったと見なしておくことも許されるであろう。そこで、この書物の構成であるが、『四声通解』所引の「蒙古韻略」は漢語の四声すなわち平上去入のそれぞれにパスパ文字を付した書であったようだ[3]。この点について『古今韻会挙用』の「蒙古韻略」には今のところ反証はないようなので、やはり同様に四声のそれぞれにパスパ文字を付した書であったと見なしておいてよい。いっぽう「原本蒙古字韻」(一巻)は、「蒙古韻略」とは異なり、パスパ文字の見出しのもとに平上去入の漢字をまとめたものであったことは現存する『倫敦抄本』(二巻)からわかる。そこで、このような両書の関係をどのように想定するかということが問題となる。ここでは「蒙古韻略」を改編しパスパ文字と漢字の簡便な対照表としたものが「原本蒙古字韻」(一巻)であり、改編にあたり材料の漢字は主に王文郁撰『新刊韻略』から採ったと考えた[4]。なお漢字には義注は付されていなかったはずである。これが現存する『倫敦抄本』(二巻)のおおもとの書すなわち「原本蒙古字韻」(一巻)である。

以上は 2008 年 11 月に述べたものであるが、現在では別の考えをもっており、それは他の機会に述べることとしたい。

②「原本蒙古字韻」(一巻)から③「朱宗文本」(刊本一巻)まで。簡便な内容に改変された「原本蒙古字韻」(一巻)は各地で用いられ、その結果「湖北本」や「浙東本」などと呼ばれる異本が幾つか出て、互いに異同が生じた。もっとも、「原本蒙古字韻」(一巻)自体にも問題があり、それは異本にも受け継がれていた。そこで、朱宗文はこれらの異本を、『古今韻会挙要』と郭守正増修『増修校正押韻釈疑』(景定甲子・1264)を用いて校訂した[5]。さらには、『増修校正押韻釈疑』によって義注付きの漢字を増補し刊行した[6]。これが「朱宗文本」(刊本一巻)である。それは至大元年(1308 年)のことであった。

③「朱宗文本」(刊本一巻)から④「補修本」(刊本一巻)まで。その後、五十年程経った元代末期の頃には、「朱宗文本」(刊本一巻)はすでに珍しい書となっていたものと思われる。当時、ある人物がその書を入手したのだが、あちらこちらに欠落があった。欠落はあったけれども、その書の価値を認め、欠落した部分を手持ちの「浙東本」を用いて補って「補

---

[3] 遠藤 1994、中村 2003。「蒙古韻略」と「原本蒙古字韻」を同一の書とする論もあるが、この二つの書は構成が異なっていたようである。『倫敦抄本』を見ると、先ずパスパ文字があり、その下に四つの声調の漢字が並んでいる。「原本蒙古字韻」も『倫敦抄本』と同様であったはずである。ところが、遠藤 1994 や中村 2003 によると、『四声通解』に引用された「蒙古韻略」のパスパ文字の利用の仕方は、『倫敦抄本』とは違っていたらしい。遠藤氏は、『四声通解』の「此れより日母に至るまで、平声と去声の二声は蒙音を失う(自此至日母平去二声失蒙音)」(上 35a)という記述を次のように解釈した。すなわち、平声と去声のパスパ文字が無いということは、上声にはパスパ文字が有ったということになる。そうであるならば、「蒙古韻略」では四つの声調のそれぞれにパスパ文字が付されていたのかもしれないと言う。中村氏は、「蒙古韻略」のハングルによる注記が、声調によって異なる例が幾つか有ることを指摘した。例えば、『倫敦抄本』の dǔo に対して、「蒙古韻略」は上声で due、入声で doe となる。このように、声調によって表記が異なるのは、パスパ文字が四つの声調のそれぞれに付されており、それをハングルで書き換えたためであるとした。

[4] 『倫敦抄本』の所収字が『新刊韻略』から採られたことは寧忌浮 1992, 1997 などで明らかにされている。

[5] 吉池 2008b。

[6] 吉池 1993a。

修本」(刊本一巻)を作り刊行した。これが第一回目の欠落の補修である。補修用に利用された「浙東本」は、朱宗文による校訂や増補を経ていなかったため、当然のことながら、補修部分は朱宗文の校訂の通りには直っておらず、義注付きの漢字もない[7]。

④「補修本」(刊本一巻)から⑤「四庫採進本」(抄本二巻)まで。さらに時代もくだり、清朝の乾隆 37 年(1772)から乾隆 43 年(1778)にわたる頃、四庫全書の編纂にかかる書籍の収集が大規模に行われたという[8]。その当時、「補修本」(刊本一巻)は著名な書家に伝わっており、これも収集の候補にのぼった。しかしながら、巻頭と末尾の二箇所に欠落が生じており、すでに完本ではなかった。採進本として提出するには状態が悪かったのであろうか、あるいは他の事情があったためか、この刊本は抄写されることになった。巻頭と末尾の二箇所に欠落のある「補修本」(刊本一巻)を書き写す際に、巻首にあって前半葉が欠けていた“廻避字様”を本文末尾の欠落の後に移し、欠落した部分を一箇所にまとめた。そしてさらに、一巻であったものを上下二巻に分けた。これで、目に付く欠落部分は下巻の末尾のみとなった。なぜこのようなことをしたのか。それは、体裁を整えて「四庫採進本」(抄本二巻)として提出するためであった。もっとも、体裁を整えるという理由だけで分巻するのかという疑問が残る。他に蒙古字韻を二巻とする記述がありそれに従ったということであるかもしれないが今のところ確たる証拠はない[9]。そこで当面は“体裁を整えるため”ということにしておく。いずれにしてもこれが第二回目の欠落の補修であった。

⑤「四庫採進本」(抄本二巻)から⑥『倫敦抄本』(二巻)まで。なお、「四庫採進本」(抄本二巻)の構成と状態は『四庫提要』に書かれている。それを現存する『倫敦抄本』(二巻)と比べ見ると、両者の構成はぴたりと一致する。『倫敦抄本』(二巻)は「四庫採進本」(抄本二巻)と同一書であるか或いはその写しであるとして大過ない[10]。

---

7 吉池 2008c。現存する『倫敦抄本』(二巻)の巻首には朱宗文による本文の校訂をまとめた“校正字様”と題された葉が付されているのであるが、本文を精査するとその“校正字様”の通りに校訂されていない部分がある。校訂されていない部分は「浙東本」の誤とされるものであり、「浙東本」の誤を含む前後には他と異なる特徴がある。その特徴の一つは、義注が付された漢字が無いということである。これによって、「浙東本」の誤を含み義注が付された漢字が無い部分即ち“下四 a～下五 b および下二十一葉 b 以降の大半”は「浙東本」であると結論することができる。このように、欠落が生じた「朱宗文本」を「浙東本」で補修し刊行したものを「補修本」と称するのである。これ以後述べるように、この「補修本」(刊本一巻)に基づき「四庫採進本」(抄本二巻)が作られ、その「四庫採進本」(抄本二巻)を抄写したものが『倫敦抄本』(二巻)ということになる。

8 黄愛平 1989 によると“在全国範囲搜訪征集圖書，是《四庫全書》編纂初期一項規模浩大的重要活動。這項工作始於乾隆三十七年（1772 年），迄於四十三年（1778 年），而以三十八、三十九年間為最高潮”（22 頁）とある。

9 かつて吉池 1993b において、蒙古字韻を二巻とする何らかの情報により分巻したとするのが穏当であるとした(35 頁)。この考えは今も変わらないが確証はない。なお、『欽定続文献通考』(乾隆十二年勅撰・1747 年）に“朱宗文蒙古字韻二巻”とあるが、これは分巻後の「四庫採進本」の情報によったものであろう。『欽定続文献通考』が基づいた明・王圻『続文献通考』には蒙古字韻の記載はない。

10 吉池 1993b 参照。両者の構成はともに二巻であり、ともに“廻避字様”という一葉を第二巻の末尾に置く。“廻避字様”はもともと巻首にあったもので、巻末に置くなどということはあってはならない誤りである。このような特異な構成が一致しているからには、両書を同一書であるか或いはその写しとみてよい。なお、吉池 1993b および 2008 年 11 月では「篆字母は両者とも不足しているにもかかわらずその数が一致する」とし、これも両書を同系とする根拠とした。しかしながら、現在では、『倫敦抄本』の篆字母表はそれが付された当初より不完全なものであったかも知れず、そうであるならば、これは根拠にならないとの

「四庫採進本」（抄本二巻）は採進時に新たに改定書写されたとなると、その書写年代は四庫全書の編纂にかかり書籍の収集が大規模に行われた時期すなわち乾隆 37 年（1772）から乾隆 43 年（1778）にわたる頃であった蓋然性が大きい。これにつきなお考慮すべき点もあるが今のところそのように考えておく。いっぽう、『倫敦抄本』（二巻）は尾崎 1962 の欠筆に着目した研究により乾隆年間（1736-1795）に書写されたことがわかっている。ところで『倫敦抄本』（二巻）は、「四庫採進本」（抄本二巻）と同一書であるか或いはその写しであるから、その書写時期は乾隆 37 年（1772）から乾隆 60 年（1795）ということになる。これに書写の下限を乾隆 42 年（1777）以前とし得る場合もあるという説を加えると[11]、両書の書写年は以下のようになる。

・「四庫採進本」。乾隆 37 年（1772）～乾隆 43 年（1778）或いは乾隆 42 年（1777）

・『倫敦抄本』。　乾隆 37 年（1772）～乾隆 60 年（1795）或いは乾隆 42 年（1777）[12]

この『倫敦抄本』（二巻）はその後、イギリスの大英図書館の所蔵となり、1921-1971 年の間に裏打ちなどの改装が施され現在に到っている[13]。『倫敦抄本』（二巻）の複製本として、初期のものとしては関西大学の写真複製本と羅常培・蔡美彪 1959 に掲載された模写本がある。ともに同一のネガフィルムによるものとおもわれる[14]。なお、関西大学写真本は改装前の状況を知り得る複製本として価値がある。近年のものとして照那斯圖・楊耐思 1987 があるが、これは関西大学写真本を再複製したものである。三者ともに本文の一部に欠落があるという欠点を有していたが[15]、最近になってようやく『倫敦抄本』（二巻）の完全な写真複製本が韓国学中央研究院より発行された。発行期日は 2008 年 11 月 18 日とある[16]。もっとも、これは裏打ちなどの改装が施されたものの複製であり、改装前の状況がわかる関西大学写真本の価値がこれによって減じるものではない。

以上、模式図につき略説し最後に『倫敦抄本』（二巻）とその複製本について触れたわけ

---

考えに傾いている。この点については、別の機会に述べる。

11 尾崎 1962 によると次のようである。乾隆 40 年及び 42 年の二度にわたって外国人名地名改訳の諭告が発せられたけれども、現存する蒙古字韻抄本にはその諭告が反映されていない。即ち、朱宗文の別名“朱伯顔”は、諭告に従うならば、現に『四庫提要』にあるように“朱巴顔”とすべきであるがそのようになっていない。これより、“諭告に最も近い場所”で写本がつくられた場合に限って、書写の年代を乾隆 42 年以前とすることができる。（以上取意）

12 吉池 2009 による。

13 『倫敦抄本』を実際に見てその特徴などを報告したものに橋本 1971、遠藤 1990、吉池 1995 がある。裏打ちなどの改装の時期に就いては吉池 2008a を参照。改装前の状況を示す関西大学の写真複製本は石浜純太郎氏が 1921 年に撮影したものに拠るから、すくなくとも 1921 年（撮影期日）から 1971 年（橋本 1971 の報告の時点では既に改装済み）の間に大英図書館において裏打ちされ現在の装丁となったことになる。この改装時期の限定は大雑把なものであるが、もしも大英図書館に作業記録のようなものがあるならば直ちに明らかになるであろう。

14 同一ネガフィルムによることは吉池 1995 で指摘した。

15 複製本を作成する時点で生じた欠落部分については吉池 1995 参照。

16 これまで、完全な『倫敦抄本』は大英図書館配布のマイクロフィルムに拠るしかなかった。今回発行部数 300 の限定出版ではあるが、完全な写真複製本が正式に発刊されたわけであり、その意義は極めて大きい。なお、本書末尾には鄭光氏（高麗大学名誉教授）の解題が付されている。

であるが、元末に④「補修本」（刊本一巻）が刊行されたとすることについては今少し丁寧に述べる必要があろう。

3. 元刊「補修本」（一巻）の存在を想定する根拠

かつて、尾崎 1962 は欠筆により『倫敦抄本』（二巻）の書写年代を乾隆年間と論証したわけであるが、その同じ論文のなかで“この鈔本が、次つぎと、いわゆる伝鈔を重ねて来たものでなく、たとえば元刊本のようなものがあって、乾隆年間に、それから直接に鈔写されたものだとしても、時はすでにパスパ文字そのものを完全な死物としてしまった後代のことなのであるから、誤写は大変起こり易かったと、いわなければならないであろう。”と述べた。この一文の主旨は、『倫敦抄本』（二巻）の藍本がどのようなものであったとしても、清代の書写であるからには誤写は起こり易かったというものであり、藍本について述べた訳ではない。しかしながら、この一文は示唆に富む。わたしは、“たとえば元刊本のようなものがあって、乾隆年間に、それから直接に鈔写されたものだとしても”という例えを、そのまま認めるものであり、それによって元末に刊行された「補修本」（刊本一巻）の存在を想定することができるのである。この想定は、以下の三つの資料を比較検討した結果として、それほど不当なものではないと考える。

一、現存する蒙古字韻の唯一のテキストである『倫敦抄本』（二巻）。

二、刊本の情報を記した記録。蒙古字韻の刊本は亡佚して伝わらないが、清の道光年間（1821-1850）に羅以智という人物が刊本を実際に見たという記録がある。羅氏は目にした刊本の体裁を『恬養斎文鈔』（合衆図書館叢書所収）の第三巻に“跋蒙古字韻”と題して書きとどめた。

三、抄本の情報を記した記録。『四庫提要』に「四庫採進本」（抄本二巻）の構成と状態が記されている。

さて、上の二に挙げた“跋蒙古字韻”の記載によると、羅以智が見た元刊本は「湖北本」や「浙東本」などの類ではなく朱宗文の序が付されたものであり、“一巻本で首尾にいささか欠落”があった。いっぽうの現存する『倫敦抄本』の状態はどうかというと、上下巻に分かれた二巻本で下巻の末尾のみに欠落がある。両者は、巻数や欠落の状態を異にする。しかしながら、『倫敦抄本』（二巻）に見られる種々の特徴に基づき、その藍本を再構成すると、それは一巻本であり首尾にいささか欠落があったことがわかる。両者は、一巻本で首尾に欠落があるという点で一致するのである。そうであるならば、現存する『倫敦抄本』（二巻）は、羅以智が見た元刊本一巻を写し取って体裁を整えたものと見なして矛盾はない[17]。わたしは、次ぎに述べることとも考え合わせ、両者の一致を偶然として捨て去ることはしなかった。

すなわち、羅以智が見た元刊本一巻には伝本の経緯が記されており、それを“跋蒙古字韻”に書き残してくれていたのである。それによると、明代中期の書家である文徵明を経

[17] このことは吉池 1993b で述べた。

て、清代初期の書家である蒋深に伝わったものであるという。このように、この書はけっして出所の知れないものではなかった。著名な書家の所有物であるからには、ある程度その存在は知られていたはずである。必要であるならば、公の場に出ても少しもおかしくはない。そこで、乾隆年間の四庫全書編纂の折に、「四庫採進本」(抄本二巻)の藍本となったと想定したのである。もっとも、この元刊本一巻は、朱宗文が校訂をした「朱宗文本」(刊本一巻)そのものではなかった。それというのも、「四庫採進本」(抄本二巻)の系統に属す『倫敦抄本』(二巻)を精査すると、「浙東本」を利用して補った部分があることが分かる。したがって、この羅以智が見た元刊本一巻は「朱宗文本」(刊本一巻)を「浙東本」で補修した「補修本」(刊本一巻)ということになる。刊行の時期は、「朱宗文本」(刊本一巻)より五十年程後の元末と想定した。

以上を要するに、「補修本」(刊本一巻)は、乾隆時代には「四庫採進本」(抄本二巻) の藍本となり、さらにその後、道光年間まで伝わり羅以智によって見いだされ、その構成と状態は“跋蒙古字韻”という一文に書きとどめられたということになる。その後、この「補修本」(刊本一巻)の行方は知れず、「四庫採進本」(抄本二巻)の系統に属す『倫敦抄本』(二巻)のみが今に残ることとなったのである。ここに本模式図の成立に係わる仮説“羅氏所見の元刊本一巻は『倫敦抄本』(二巻)の藍本である”ということを確認した次第である。

**<参考文献(発行年順)>**


関西大学東西学術研究所 1956.『影印大英博物館蔵舊鈔本蒙古字韻』大阪：関西大学。

羅常培・蔡美彪 1959.『八思巴字與元代漢語〔資料彙編〕』北京：科学出版社。

尾崎雄二郎 1962.「大英博物館本蒙古字韻札記」,『人文』第 8 集,162-180 頁。

鄭再發 1965.『蒙古字韻跟跟八思巴字有關的韻書』台北：国立台湾大学文学院。

橋本萬太郎 1971.「ブリテン博物館蔵旧抄本蒙古字韻雑記」,『AA 研通信』14,1-4 頁。

兪昌均 1973.『較定蒙古韻略』台北：成文出版社。

照那斯圖・楊耐思 1987.『蒙古字韻校本』北京：民族出版社。

黄愛平 1989.『四庫全書纂修研究』北京：中国人民大学出版社。

遠藤光暁 1990.「在欧のいくつかの中国語音韻史資料について」,『中国語学研究　開篇』第 7 号,25-44 頁。

寧忌浮 1992.「《蒙古字韻》校勘補遺」,『内蒙古大学学報(哲学社会科学版)』1992 年第 3 期,9-16 頁。

吉池孝一 1993a.「『蒙古字韻』の増補部分について」,『語学研究』(拓殖大学語学研究所)第 72 号,17-31 頁。

吉池孝一 1993b.「『蒙古字韻』の元刊本と乾隆写本」,『中国語学』(日本中国語学会)第 240 号,31-40 頁。

中村雅之主編 1994.『パスパ字漢語資料集覧』富山大学人文学部中国語学研究室内パスパ字研究会発行。

遠藤光暁 1994.「『四声通解』の所拠資料と編纂過程」,『論集』(青山学院大学)第 35 号,117-126 頁。

吉池孝一 1995.「『蒙古字韻』のロンドン写本とその複製本」,『語学研究』(拓殖大学語学研究所)第 78 号,197-208 頁。

吉池孝一 1997.「中世蒙古語の漢字音訳と「蒙古字韻総括変化之図」」,『日本モンゴル学会紀要』第 27 号 (1996),77-90 頁。

寧忌浮 1997.『古今韻会挙要及相関韻書』北京：中華書局。

中村雅之 2003.「四声通解に引く蒙古韻略について」,『KOTONOHA』第 9 号,1-4 頁。

吉池孝一 2008a.「蒙古字韻の改装などについて」,『KOTONOHA』第 65 号,11-12 頁。

吉池孝一 2008b.「蒙古字韻の校訂と増補について」,『KOTONOHA』第 70 号,7-16 頁。

吉池孝一 2008c.「蒙古字韻の補修について」,『KOTONOHA』第 71 号,1-9 頁。

吉池孝一 2008d.「原本蒙古字韻再構の試み」,『International Workshop on Hunminjeongeum and hPags-pa script』韓国学中央研究院（2008 年 11 月）,141-155 頁。

吉池孝一 2009.「蒙古字韻四庫採進本及び現存写本の書写時期」,『KOTONOHA』第 74 号,41-43 頁。

韓国学中央研究院研究處編集 2008.『蒙古字韻』(影印本。解題：鄭光)韓国城南市：韓国学中央研究院。